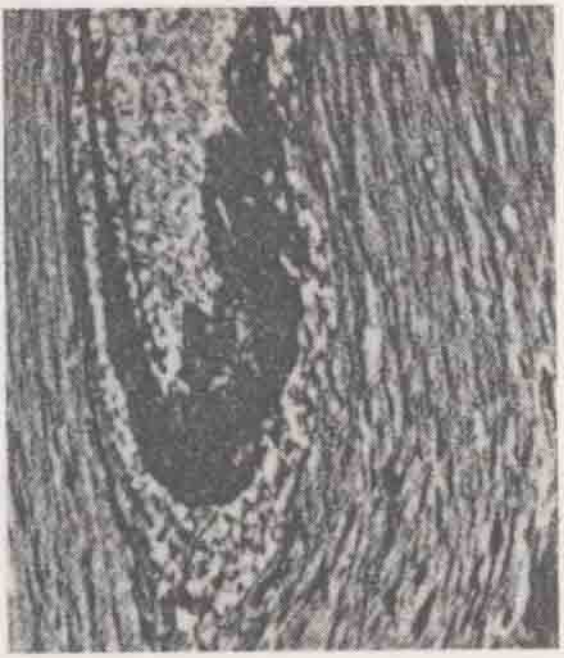
# 20世紀イギリス短篇選（下）

小野寺健編訳



徹底して負け犬の世界を描き不思議な叙情で現代人の心をうつ『あいつらのジャズ』(ジーン・リース), 中年男女の不倫の恋を扱い微妙な心のゆれをとらえた『再会』(マーガレット・ドラブル) など現代のイギリス文学を代表する11篇。これら11の人生の断片に現代という時代はどんな顔をのぞかせているか——。(全2冊)

赤 270-2
岩波文庫

20世紀イギリス短篇選(下) 〔全2冊〕

1987年11月16日 第1刷発行 ©
1988年10月 5日 第4刷発行

定価500円

編訳者 小野寺 健

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan
ISBN4-00-322702-6

江苏工业学院图书馆
藏书章
39-2704

# 20世紀イギリス短篇選
## (下)

小野寺 健 編訳

岩波書店

"The Fly Paper" by Elizabeth Taylor
from *The Devastating Boys* (Chatto, London, 1972)
Reprinted by permission of A M Heath & Co. Ltd.

"Broken Homes" by William Trevor
from *Lovers of their Time* (Bodley Head, London, 1978)
Reprinted by permission of Intercontinental Literary Agency.

"How Soon Can I Leave" by Susan Hill
from *A Bit of Singing and Dancing* (Hamish Hamilton, London, 1973)
Reprinted by permission of Richard Scott Simon Ltd. via Tuttle-Mori Agency, Tokyo.

# 目　次

あいつらのジャズ……ジーン・リース…七
確実な人生……ショーン・オフェイロン…四一
この四十年……ノーラ・ロフツ…六一
レディだけの旅……オリヴィア・マニング…七五
届かない花束……ウィリアム・サンソム…一二九
蠅取紙……エリザベス・テイラー…一三五
豪華な置時計……ミュリエル・スパーク…一四九
愛の習慣……ドリス・レッシング…一六七
欠損家庭……ウィリアム・トレヴァー…二一一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

再　会……マーガレット・ドラブル……二四三
別れられる日……スーザン・ヒル……二七三
解　説……二九七

上巻目次

船路の果て……ラドヤード・キップリング
故郷への手紙……アーノルド・ベネット
ルイーズ……サマセット・モーム
岩……E・M・フォースター
上の部屋の男……P・G・ウドハウス
キュー植物園……ヴァージニア・ウルフ
痛ましい事件……ジェイムズ・ジョイス
指ぬき……D・H・ロレンス
脱　走……ジョイス・ケアリー

ジョコンダの微笑……オルダス・ハックスリー
幽鬼の恋人……エリザベス・ボウエン
単純な生活……H・E・ベイツ
解　説

# あいつらのジャズ

ジーン・リース

七月の日曜日。いま住んでるノッティング・ヒルの家主と朝っぱらから喧嘩する。一か月分の部屋代を前払いしろなんて言うのだ。もう冬から住んでいて、毎週きちんと払っているのに、そんなことを言う。わたしはいま失業中だから、大家の言いなりにお金を払ったらいくらも残らない。だから断る。大家の主人はこんな朝っぱらからもうへべれけで、さんざん毒づくけれど、口だけなら、こっちはびくともしない。けれどもおかみのほうはひどい――この女は部屋の中まで入ってきて、金を渡せと言う。いやだと言ったら、女がスーツケースを蹴とばしたので、パックリ開いてしまった。いちばん上等のドレスが飛び出すと女は笑って、もう一度蹴とばす。一か月分の前払いは常識だ、と女は言う。払えないんなら出てっとくれ。

ロンドンはうんざりだ。石みたいな心の持主ばかりだ。何かで訴えると、きまって「証拠を出せ」とくる。でも誰も見てなくて、証人になってくれないんだから、証拠なんか出せるはずがない。だから、わたしは荷物をまとめて出ることにする。あんな女は相手にしないほうがよさそうだ。まったく質が悪くて、悪魔も顔負けだ。

コーヒーとサンドイッチが食べられる近所の店が開くまで、うろうろする。同じテーブルの男に話しかけてみる。前に話しかけてきたことがあって、顔なじみだけれど、名前は知らない。

しばらくすると男が訊く。「どうしたんだい。何か困ってるのか？」ごたごたの話をしたら、見通しがたつまで男が持っている空部屋にいればいいと言ってくれる。

この男はふつうのイギリス人とはぜんぜん違う。すぐに話がわかって、すぐに決断する。イギリス人が決断するまでは大変だ――何か相談をもちかけて決断してもらうまでには、こっちは半分死んでしまう。それだけじゃない、この男はあたりまえのように何でもはっきり言う。わたしみたいな生きかたがわかってるみたいだ――だから素直に好意をうけて別れる。

男の話だと、そのフラットは先週まで誰かが入っていたから何でも揃っている、道順は教えてくれるという――ヴィクトリア駅から四十五分のところで、急な坂を上って左に曲がればすぐわかるという。男は鍵を渡してくれて、封筒の裏に電話番号も書いてくれる。その下に、「六時以後は、シムズさんを呼んでくれ、ということ」と書いてある。

その晩電車に乗っていると、運がいいなと思う。日曜に、行く先のあてもなく歩きまわるなんて――考えても気がめいる。

探しあてた一階のフラットの、寝室は申し分ない――鏡が二つ、洋服だんす、ふつうのたんす、シーツ、みんな揃っている。ジャスミンの匂いがする。でも、つよい湿気の臭いもする。

向いの部屋のドアを開けてみると、テーブルがひとつに椅子がふたつ、それにガスレンジと食器戸棚がある。でも部屋が大きすぎてがらんとした感じだ。ブラインドを上げてみると、壁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紙がまくれている下に、きのこが生えているのが見えた――こんなのは初めてだ。

バスルームもおんなじで、蛇口はみんな錆びている。この二部屋はそのままあきらめて、寝られるようにベッドを片づける。それから耳をすましてみても、何の音もしない。この家には誰も入ってこないし、出て行く人もいない。いつまでも目をあけてじっと寝ていたけれど、ここは出て行こうと決心して、朝になると、気が変らないうちにいそいで仕度をする。いちばん上等のドレスが着たくなったのに、出してみると厭な気がして着られない。下宿のおかみにそれを蹴とばされて、泣いたのを思い出すからだ。泣き出すと、止まらなくなる。泣きやんだときにはくたびれてへとへとだ。疲れ切った婆さんのような気持ちだ。引越す気がなくなる――がまんしてここにいよう。でもやっと廊下へ出て行くと、葉書が来ている。「いたいだけここにいなさい。すぐ会いに行く――たぶん金曜に行きます。心配することはない」名前は書いてないけれど、悲しい気もしなくて、「いいわ、あの人が来るまで待っていよう。もしかすると仕事もみつけてくれるかもしれない」と思う。

この家に住んでいるのはいちばん上の階の夫婦だけだ――静かな夫婦で面倒なこともない。べつにこっちから文句を言うことはない。

その奥さんにはじめて会うのは、奥さんが正面のドアをあけたときで、ひどくこっちを探るような目付きをする。でも、二度目に会うと、奥さんは微笑をうかべるので、わたしのほうも

微笑する――一度は話しかけてきた。この家はとても古い、百五十年はたっていて、奥さんとご主人はずいぶん昔からここに住んでいるという話だ。「貴重な建築よ」と奥さんはいう。「残すのが当然だと思うんだけど、むろん何の手も打とうとしないの」それから今の持主の話をして――持主といえるのかどうかわからないが――この持主がさんざん当局と交渉したのに、相手はうるさいことばかり言うのだそうだ。「あの人たちは昔の美しい建物をとりこわすことに決めてるのよ――情けない話だわ」

何もかも情けない話ばかりだと、わたしは相槌を打つ。でも、どうすればいいのだ、どうすれば。この家には品がある、おかげで同じ通りの他の家が安っぽく見えるとわたしが言うと、奥さんは嬉しそうな顔をする。たしかにそれはそのとおりなのだ。この家はあわれな、とり残された感じがする。夜はよけいそうだ。けれども、趣きがある。三階は閉めっぱなしで、わたしのいるところにしても、空いている二部屋へは一度は行ってみたけれど二度と入っていない。

階下は地下室で、古い板やこわれた家具で一杯だ――ある日大きな鼠を一匹見つけた。ほんとに一人でいられるような家ではなくて、夜になるとたいていワインを一本買ってくる癖がついてしまう。ウィスキーは嫌いだし、英国のラム酒はだめなのだ。とてもラムという味ではない。いったいどんな作りかたをしているのだろう。

グラスで一、二杯飲むと歌を歌いたくなって、歌うとみじめな気持ちもきれいに忘れてしま

う。たまには自分で歌を作ってみるけれど、あくる日の朝には忘れてしまうので、「じれったいわ」とか「もういじめないで」みたいな昔の歌を歌うこともある。

外へ出ようかと思うけれど、出ない。ただ夜がきてワインを飲むだけが楽しみだ。わたしの暮らしている所は、どこも——そんなことはどうでもいいけれど、この家は別なのだ——がらんとしていて物音もせず、影ばかりたくさんある。だから、がらんとした部屋になぜ影がたくさん見えるのだろうと、不思議になることもある。

台所で食事をしてから、上等なものをみんなきれいに手入れして、暑いのでシャワーを浴びる。そのあとで窓の枠に両肘をついて庭を眺める。雑草のあいだに赤い花、青い花が見える。そしてリンゴの木が五、六本。でもリンゴの実は落ちて、雑草の中にころがったままだ。あまり酸っぱいので誰も拾わない。その向うの塀のきわあたりには、もっと大きいのが一本生えている——たしかにこの庭は広すぎる。この家をこわそうというのも、そのせいかもしれない。

夏中ほとんど雨が降らないのに、かと言ってよく日が照るわけでもない。もっと日がほしい。芝は茶色くひからびて、雑草の丈ばかり高くなり、植木の葉はぐったりしている。赤い花——罌粟(けし)だ——ばかりが日差しをもとめてのびるばかりで、あとはみんな元気がない。

お金のことはどうでもいいけれど、ワインだのガスメーターに入れるコインだので、お金はどんどん減っていく。だから食べものにむだづかいはできない。日が暮れてから外を歩いてみ

る――リンゴの木のそばではなく通りに近いほうだ――それほど淋しくはない。

こっちには塀がないので、隣家の女が生垣ごしに見ているのがわかる。はじめはこんばんはと声をかけてみたけれど、女がそっぽを向いたので、それからはかけない。よく男がいっしょにいる。黒いリボンの麦藁帽をかぶって、金縁の眼鏡をかけた男だ。大きすぎるのか、背広がだらんとしている。どうやら亭主らしいけれど、わたしを見ている目付きは細君よりもっと悪くて――野放しの野獣でも見ているように眺める。こういう態度が気に入らないので、一度亭主に面と向って笑ってやる。そのうちに目を向ける気さえなくなってしまう。心配事なら、ほかにいくらでもあるからだ。

わたしの気持ちを説明しておこう。正確に憶えているわけではないけれど。ここへ来てから二度目の土曜日だったはずだけれど、そろそろワインを買いに出ようと思いながら窓ぎわにいると、誰かが肩に手をかけた。シムズさんだった。さわられるまでぜんぜん気がつかなかったのだから、よほど静かに入ってきたのだろう。

彼はやあと声をかけてから、おそろしく痩せたな、いったい物を食べているのかと言う。むろん食べてるわと言っても、彼はこんなに痩せているのはわたしらしくないから、村まで行って食べものを買ってくる、と言う。（これが彼の言いかたで、この辺に村などありはしない。そうかんたんにロンドンから逃げられはしないのだ）

シムズさんだってあまり元気には見えないのだけれど、それならアルコールを買ってきてくれないか、お腹はすいてないから、とだけ言う。

彼は三本かかえて帰ってくる――ベルモットとジンと赤ぶどう酒だ。それから彼は前にここにいた性悪女がガラスをみんな割ってなかったかと訊くので、何枚か割れていた、破片があったと返事をする。でも全部じゃないわ。「あんた、喧嘩したの？」

彼は笑うだけで答えない。酒をついで「さあ、このサンドイッチをみんな食べろよ」と言う。男には、そばにいてもあまり気にならない人がいる。そういう男だと、何でも言われたとおりにする気になる。こっちは心配なことを忘れて安心な気持ちになれるからだ。言葉や態度で命令されるわけではない。何となく感じでわかるのだ。だから、わたしはシムズさんとも深刻な話はしない――今夜を台無しにはしたくないからだ。ただこの家について、なぜこんなにがらんとしているのかと訊いてみる。

「上のおいぼれが何か喋ってたのかい？」

「あの奥さんの話だと、役所があんたの言うことを聞いてくれないんですって？」

「とんだ買物だったよ」彼は言って、借家権を売るとかそんな話をするが、わたしはろくに聞いていない。

わたしたちは窓ぎわに立っていた。日が沈みかけていた。もう日は差していない。彼は片手

でわたしの目に蓋をする。「大きすぎるね――きみの顔には大きすぎる」そう言いながら、赤ん坊にキスするみたいにわたしにキスする。その手が放れると、彼は庭を見ている。「困るんだな。やっぱり困る」と彼は言う。

わたしのことでないことはすぐわかるので、訊いてみる。「それなら売るの？　気に入ってるんなら持ってなさいよ」

「何を売るんだ？　こんな家の話をしてるんじゃないよ」

何の話なの、とわたしは訊く。「金さ」と彼は言う。「金だよ、おれが話してるのは。どうやって金を稼ぐかってことさ」

「お金なんかどうでもいいわ。お金のほうでわたしが好きじゃないんだもの、しようがないじゃない」わたしは冗談で言ったのに、彼は真青な顔でふりむくと、バカだと言った。それでは一生ひどい目にあわされて犬みたいに死ぬことになる。いや犬よりももっと悪い。犬ならあっさり殺してもらえるのに、わたしはマンガみたいな自分になるまで生きていなくちゃならないから。「自分のマンガ」彼はうまいことを言った。自分が生まれた日を呪うことになるぞ、この世のあらゆることあらゆる人間を呪いながら死ぬことになるぞ、と彼は言った。

「そんな気持ちにはならないわ」とわたしが言うと、彼は笑顔ともいえない笑顔をうかべて、運命に満足しているのはけっこうなことだと言う。「セリナ、きみにはがっかりしたよ。きみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com